

die Reifeprüfung mit einer Prämie Kurze Zeit darauf begann ich zu konzertieren in Deutschland und Frankreich. Meine Konzerttätigkeit wurde dann durch den Krieg unterbrochen.

Im Jahre 1919 zog ich von Leipzig nach Berlin und arbeitete mit Prof. Kreutzer. 1920 fing ich wieder an zu konzertieren und spielte seit dem über ganz Deutschland. Die Saison 1923 - 24 war ich in Nord - Amerika und spielte dort in allen grösseren Städten.

Von meinem fünfzehnten Lebensjahre ab habe ich viel Unterricht erteilt, war Assistent von Professor Kreutzer der an der Hochschule in Berlin tätig ist; Ausserdem war ich ein Jahr Professor an einem Privatkonservatorium in Berlin.

Als Inhaber eines Passes der Internationalen Liga (Nansen) gelte ich als statutenlos. In Russland bin ich seit 1906 nicht mehr gewesen.

gez. Leonid Kochanski (Künstlernamen)  
(Josef Kaganoff)

Berlin-Schöneberg, am 5. Dez. 24.

Heilbronnerstr. 12<sup>m</sup>

(「外國人教師關係」自大正十三年至昭和十一年)

十四年四月八日起案 決定 決行

本月四日附備入契約ヲ締シタル外國人教師ヨセフ・カガノフノ俸給ハ曩ニ一ヶ月金六百圓ノ豫定ヲ以テ御許可ヲ得マシタガ今回金五百

圓ト改定シタルニ付報告致シマス  
大正十四年四月八日

校長

文部大臣宛

[手書き]

(「外國人教師 自大正十三年至昭和十一年」)

コハンスキ教授送別洋琴演奏會

東京音樂學校洋琴科教授レオニード・コハンスキー氏は愈々満期となり歸國することゝなつたので氏の教へ子達が集り一月廿一日夜七時日本青年館で送別演奏會を催ふことゝなつた。出演者及び曲目は左の通り。

山越八重子バツハ・リスト作イ短調前奏曲とフーグ、木村ゆき、  
一藤幸子二重奏モーツァルト作ブゾーニ編魔笛の序曲、遠山つや子  
ベートーヴェン作告別奏鳴曲、赤羽田鶴子メンデルスゾーン作變ロ  
短調練習曲、シユーパート作へ短調即興曲、吉原千重子シユーマン  
作花の曲、ヴェレット第一、澤崎秋子シヨパン作ニ短調奏鳴曲、見  
田公子リスト作グノメン舞曲、十四行詩、パガニニ練習曲、平戸富  
美代、平戸喜代子二重奏アレックスキー作曲。

(「音楽世界」三一一 昭和六年一月号 一五四頁)

(七) シャーレス・ラウトルップ Chales Lautrup

在職期間 大正十五年〜昭和六年

外國教師・備外國人教師

担当科目 管弦樂、合唱、唱歌

履歷(要約)

一八九四年一月十七日デンマークのコペンハーゲンに生まれる。コペンハーゲン大学でヴィックスにピアノを師事、ドイツ・ベルリンのシュテルン音楽学校に留学、C・シュレーダーに管絃樂・指揮法を師事。

一九二一年ベルリンで指揮者としてデビューし、一九二三年デンマーク宮廷歌劇場長に就任。

一九二六年(大正十五年)東京音楽学校に招かれ来日、教授・演奏活動を行う。

一九二九年(昭和四年)奏任五等に準ぜられる。  
一九三〇年(昭和五年)勲六等単光旭日章を授与される。

本公第三二四號

大正十四年十一月廿七日

在獨

臨時代理大使 伊藤述史印

外務大臣男爵幣原喜重郎殿

東京音楽學校ニ於テ外人教師備聘方ノ件

本年八月四日附歐二普通第六八號ニ關シ當地在留文部省在外研究員船橋榮吉ヨリ丁抹人「チャールズ、ラウトルップ」(Charles Lautrup)ヲ東京音楽學校外人教師トシテ推薦有之タルニ付同人ト假契約ヲ締結セル次第ハ客月七日發拙電第一七一號ヲ以テ通報ニ及ヒタル度茲ニ假契約書(和文歐文各壹通)送付スルニ付可然御取計相求度シ。

追而同人ハ來月十四日伊太利亞「ナポリ」港御帆ノ日本郵船會社汽船箱根丸ニテ印度洋經由本邦へ渡航スル趣ニ付爲念申添ユ。

(手書き) (外國人雇備雜件) 外交資料館蔵

昭和四年一月十七日起案

上申案

本校備教師丁抹人博士シャーレス・ラウトルップハ大正十五年一月本校ニ來任シテヨリ以來唱歌及管絃樂ノ指揮者トシテ益々功績ヲ擧ゲ同年五月ヨリ昭和三年六月ニ至ル本校教師ノ演奏會ニ於テ既ニモツアルト作『鎮魂歌』ヘンデル作『埃及に於けるイスラエル』ノ如キ古典的各曲竝ニフランク作『シンフォニー的變奏曲』レーゲル作『モツアルトノ主題ニ基ケル變奏曲及ビフーガ』ノ如キ近代各曲ヲ吾邦ニ紹介シタルノミナラス昭和三年十二月二十二日本校ニ於テ皇后陛下御前ニ大禮奉祝演奏ヲ行ヒタル際ニハベートヴェン作『莊嚴ナルミサ』ノ大曲ヲ上聞ニ達シタリ、此ノ曲ハ泰西音樂品中ノ第一二位スルベートヴェンノ晩年円熟ノ作ニ係リ其規模ノ宏大、内容ノ充實ニ於テ他ニ比類ヲ見ザルト共ニ演奏ノ困難ナル點ニ於テモ亦有名ナルモノマシテ本邦ニ於テハ未タ曾テ其演奏ヲ企テタルモノナク、過般ノ御前ニ於ケル演奏ハ實ニ本邦ニ於ケル最初ノ演奏ニシテシカモ之カ成功ヲ内外識者ノ驚嘆セル所ナルハ別紙外字新聞ノ記事ニ依ルモ明瞭ナリトス。ラウトルップガ此ノ難曲ヲ滞リナク上聞ニ達スルコトヲ得タルハ獨リ其ノ技量ノ卓越ヲ證スルノミナラス熱誠ヲ以テ教授ノ任ニ當リ、不斷ノ努力ニヨツテ能リ多數ノ獨唱者合唱者管絃樂演奏者ヲ指導シ統御シタルニヨル、以上ノ事實ニ

徴スレハ同人ハ就職ノ日尙殘レト雖本邦音樂教育上ニ盡シタル功勞  
顯著ナルヲ以テ爾今身分高等五等以上ニ取扱ハル、様致度前例ノ如  
何ヲ問ハズ破格ノ御於議相成度此段上申ス

年月日

校長

文部大臣宛

(手書き)

(「外國人教師關係」自大正十三年至昭和十一年)

### ラウトルツプ教師叙勳

畏き遑りでは教師丁抹國人シヤールレスラウトルツプ氏が日本を去る  
に臨み、在朝五年半、我が音樂界に盡した功勞を思召され左の如く  
勳章御贈與の御沙汰があつたので、乗杉校長に依り去る六月廿七日  
午後二時半、横濱出帆に先ちて同氏乗船エンプレス・オブ、キヤナ  
ダ號甲板に於て莊嚴なる傳達式が行はれた。

叙勳六等授單光旭日章 シヤールレス・ラウトルツプ

(「同聲會會報」第一四七号 昭和六年七月・八月 一八頁)

### 袂別を惜しまるゝラウトルツプ教授

橋本國彦

東京音樂學校に指揮者として就任以來、足かけ七年、我が樂壇に  
異國人として、有形無形に大きな功績をたててゐるラウトルツプ氏  
の袂別も近づいたので、まことに名残り惜しいことである。(中略)  
氏はクラシックに對して凡庸指揮者、否、相當の指揮者さへも到  
底及ばない精密なる解釋をもつてゐる。決して粗野に流れることの

ない、又、そう云ふ流儀を許されぬモツァルト等のロココ風に對す  
るインタープレートとしても眞にふさはしい指揮者である。氏が來  
朝して最初に、モツァルトの變ホ長調交響樂や、絃樂セレナードを  
擇んだ事は氏の嗜好趣味をも充分知ることが出來た。當時、氏がパ  
ルティテウルを持参しなかつたことも注目しに値した。

前述の如き來歴をもつて一九二五年、クローン教授の後をうけ  
た、上野の新らしい指揮者は、スカンヂナビヤ系特有の風采、稍神  
經質的な愛らしき碧き眼、桃色がゝつた頬、少しも老衰を示してゐ  
ない亞麻色の髮、聰明な額、英國風の教育をうけた行動と言葉使  
ひ、必要以上の愛嬌を振りまかない、實に堂々たる美男子の紳士で  
あつたのである。

來朝以來六ヶ年の間氏の演奏した管絃樂曲の主なるものは

○ベートーヴェン 第二、第三、第七、第九(今春の豫定)

交響樂。コリオラン、レオノーレ 三、エグモンド、合唱幻想

曲(ピアノはコハンスキー演奏)等

○モツァルト 「魔笛」序曲。ハ長調、變ホ長調、ト短調(新響定

期にて)

○ブラームス ハ短調を除く全部三曲

○フランク ニ短調交響樂(新響定期)

○カールニールゼン 交響樂(新響) 序曲

○ドビュッシイ ノクチュルヌ

其の他ワグネルの序曲等中に多い。

この六年間は決して我々にとつて無意義なものではなかつた我々  
が未だ氏の獨特の指揮と解釋を充分伺ひ知ることの出來ぬ中に、本



惜しまれつゝ上野を去るチャーレス・ラウトルツ氏（『月刊楽譜』20—5 昭和6年 口絵）

年春のシーズンを最後として、アメリカの某オーケストラの指揮者として招聘されてゆくことになったので我々としては名残惜しき限りではあるが、再び歐米へ乗出す氏として其の門出を大いに祝すべきであらう。

ラウトルツ氏の指揮については、自分は約二年指揮法を親しく教はった關係上、人一倍尊敬してやまないものである。（眞の藝術家としての偉大さは單にステージの上では深く識ることはなかく出来ないものである。）

理性を失はぬ熱情（あゝ指揮者が理性を失つたら演奏者は助からない！）練習時に於ける綿密なる解釋と注意力。悪趣味やクセから作り出す自己流のない事、就中、あの立派な姿勢（これは指揮者の八分の生命であるのだ）は眼で聴く聴衆に快感を與へるばかりではない、よき姿勢の指揮者によつてこそそのバトンの下にある演奏者は樂な氣持ちで演奏できるのだ。然も指揮者の演奏者に傳へる九分の方法はジェスチュアに外ならないのであるから。

今日まで日本にも外人の指揮者は可なり來てはゐる。然し乍ら、

眞に指揮者としての教育をうけ指揮者として第一の専門とするものはラ氏をおいてなかつた様である。（後略）

（『月刊楽譜』二十一—五 昭和六年 二—四頁）

ラウトルツ氏より

合唱及管絃樂の指揮者として五ケ年間我々に親しみ深かつたシャール・ラウトルツ氏は渡米後乗杉校長の恩恵を謝し同僚や生徒達の身の上に思を遠く馳せて、如何にも氏らしい熱情的な手紙を同校長に時折寄せて來るが先日二枚のニューヨークタイムス紙切抜を同封して氏の近況を報じて來た。切抜は何れも嘗て氏の指揮に依る「基督の七つの言葉（ハイドン作）」のロンビアレコード吹込に關する米國の批評家の記事が載つてゐるもので見出しは、次の様である。

Newly Recorded Music:

I Haydn's "Seven Last Words" Recorded by Tokyo Academy of music for Columbia, (May 8.)

II Charles Lautrup's Products with Japanese Imperial Orchestra and chorus. (August 14.)

筆者バツケン・ハム氏はニューヨークタイムス紙へ常にレコードの批評を執筆しロンビア會社を通してラウトルツ氏がニューヨークに居るのを知つてわざわざラ氏に會ひに來て二人の會見の結果が八月十四日の新聞へ再び記事となつて表れたもので氏は歐洲大戦前の數年を東京駐在英國大使館書記官をしてゐた事のある大の親日家で（この點で自分にも劣らぬ人だとラ氏は書いてゐる）

る)このレコードはパ氏が神戸の知人から送つてもらつたのだといふのである。

それでこの記事は更に九月の中頃には二百萬の讀者を有する世界最大の週刊雑誌の「サタデイ・イーヴニング・ポスト」誌上に所載されるだろうとラ氏は手紙に書いてゐる。

ラ氏はこの春も米國に於いてこのレコードが放送された事を報じて來てゐるが、自分の喜びを學校の歡びとして一々報じて來る處はいかにもラ氏らしい。そして氏は手紙の度に校長に恩を謝し、そしていふ「自分は寝てもさめても、上野の事を忘れた事がない」

今度の手紙の末尾にも常にかわらぬ熱情をもつて次の様に言ふてゐる。手紙の全文を讀んでみるとラ氏には日本は何と住みよい所であつたかゝ覗はれる。

(前 張)

Often, I could say daily, my thoughts go to Japan, to Ueno, to my friends and colleagues there, and always with the feeling that the five years there were a rich, unique experience which always will remain an outstanding feature of my life.

Please bring everybody my most cordial greetings.

と校長にてんめんの情をうつたえてゐる。

(『同聲會會報』第一八六号 昭和七年九月 五〇～五一頁)

(八) ロベルト・ポラック Robert Pollak

在職期間 昭和五年～十二年(一九三〇～一九三七)

傭外国人教師  
担当科目 ヴァイオリン

履歷(要約)

一八八〇年一月十八日オーストリアのウィーンに生まれる。ヨハン・リッターにヴァイオリンを師事し、ドイツ・ライプツィヒ音楽院でハンス・シット、フーゴー・リーマンに音楽理論を学ぶ。

一九〇三年～一九〇五年ジュネーブ音楽院においてマルトリーにヴァイオリンを師事。同時に一九一四年までジュネーブ音楽院教師。

一九一二年ローザンヌ音楽学校高等科教師。第一次世界大戦中ロシアに抑留される。モスクワ音楽院教授。

一九一九年フランツ・オンドリシエクの後任として新ウィーン音楽院高等科主任。

一九二六年サンフランシスコ音楽院高等科教員。同時にカリフォルニア弦楽四重奏団長。

一九三〇年(昭和六年) 東京音楽学校教師。

一九三二年(昭和七年) 奏任に準ぜられる。

一九三四年(昭和九年) オーストリアよりプロフェッサーの称号が贈られる。

一九三七年(昭和十二年) 再び渡米。

一九四一年ロサンゼルス音楽院で教鞭をとる。

一九六二年九月七日スイスのブルンネン没。

上野の音楽學校へ來る提琴の名手

レオ・シロタ氏の骨折か

オーストリアからポ氏

上野の東京音楽學校へこの九月から新たにオーストリア人の素晴らしい提琴の名手が教授として迎へられる事になつた、この樂人は